千葉県八千代市

高津新山遺跡Ⅱ

—昭和57年度確認調査の概要—

1983・3

八千代市教育委員会

序　　文

近年、急激に開発の進む本市にあっては、市の姿の変貌は著しいものがあります。これは好悪に係わらず生活環境の変化を伴ない、生活の中で保存されてきた文化財が、忘失、散逸、破壊されるといったことがあらわれてきています。これらの開発は、確かに人々の生活水準を高めるという目的があると思います。しかし、祖先から長い年月にわたって守り伝えられてきた、かけがえのない文化遺産（文化財）を不注意な行為によって失うことのないよう、私たちは努めていかなければなりません。ことに埋蔵文化財については千葉県教育委員の御指導のもと、事前協議制を確立するなど、先行して保存措置を講じるなど市教育委員会はその体制を整備していきつつあります。

この本は文化財保存事業のうち埋蔵文化財緊急調査として、昭和56年度より国及び千葉県の補助を受けて実施している、高津新山遺跡の2年次目の確認調査の概要の報告です。調査は宅地化の波が押し寄せる本市にあって、その傾向が顕著な地域の一つである高津地区で、そういう行為に先立って、将来に保存策を講ずる基礎資料を得ることを目的としたものです。

昨年度の調査の結果、先土器時代から平安時代に至る長い年月にわたって、先人たちの暮しの場であったことがわかりましたが、57年度は更に中世の地下式横穴などが検出されたりしました。そして、先人たちが日々の暮しの中で考え、作り、使った石器や土器が出土し、また、住居の跡や土壙が数多く発見され、多くの成果を得ることができました。

本書を作成するにあたり、この調査に御協力いただいた土地所有者の方々、厳寒の中で調査に参加された皆様に謝意を表する次第です。

また、今回、この調査概報が刊行されるにあたり、この資料が広く活用いただけるならば幸いです。

昭和58年3月

八千代市教育委員会
教育長　**大熊章一**

例　　言

1、本書は千葉県八千代市高津字堀込1705番地外の、確認調査の概要をまとめたものである。

2、本遺跡の調査は、準備を昭和57年6月より進め、発掘は昭和57年12月1日に開始し、昭和58年3月1日迄実施した。

3、本書の執筆は分担執筆とし、第Ⅰ章1、第Ⅱ章2、第Ⅲ章4、第Ⅳ章を朝比奈竹男が、第Ⅲ章1、2を久保脇美朗、第Ⅰ章2～5、第Ⅱ章1、第Ⅲ章3、5を秋山利光が担当した。なお、全体を朝比奈が統一した。

4、本遺跡の出土遺物及び記録図面は八千代市教育委員会が所掌し、高津新山遺跡調査事務所に現在保管している。

5、調査にあたって地元の方々の御協力、御助言を賜わり、また器材等についてサービスセンター、区画整理課、市教委、青少年課より御協力を得た。記して謝辞としたい。

6、調査組織については以下の通りである。

調査主体　八千代市教育委員会
大熊章一（八千代市教育委員会教育長）

事務局　清水盛人（八千代市教育委員会社会教育課長）
小笠原和也（八千代市教育委員会社会教育課文化係長）
川上俊一（八千代市教育委員会社会教育課主事）

調査担当者　朝比奈竹男（八千代市教育委員会社会教育課主事）
秋山利光（八千代市教育委員会社会教育課主事補、昭和57年11月22日より）

調査員　久保脇美朗

調査補助員　小菅雄二・長谷川浩二・藤田篤・大宮浩一・村山昌広・川崎浩祐・小郷薫

調査参加者　鈴木トシ子・鈴木幸子・鈴木みよ・岩井きみ子・岩井きく・岩井とく・岩井美智枝・岩井波江・岩井純子・尾崎栄子・尾崎登美枝・岩井みよ・石井慶子・石井きよ・樫山栄子・岩井英子・岩井なか・岩井せん・鈴木あい・岩井千恵・岩井勝子・岩井栄枝・中村恵三

整理参加者　秋元百合子・植田正子・大坪智子・荻原伊津子・勝又寿子・佐治節江・鈴木孝子・渕上妙子・中村恵三

調査協力者　川端弘士・有本勝・星忠・田中英世

目　　次

第Ⅰ章　調査の概要と経過 …… 1頁
1調査の概要 …… 1頁
2発掘調査の方法 …… 1頁
3調査の経過 …… 2頁
4日誌抄 …… 2頁
5高津新山遺跡の層序 …… 3頁
第Ⅱ章　遺構 …… 5頁
1第04号住居址 …… 5頁
2地下式横穴第1号 …… 12頁
第Ⅲ章　グリッド出土遺物 …… 14頁
1先土器時代の遺物 …… 14頁
2縄文時代の遺物 …… 14頁
3グリッド出土の土師器 …… 14頁
4鉄滓と鞴羽口 …… 17頁
5中世の遺物 …… 17頁
第Ⅳ章　小結 …… 18頁

挿図目次

第1図　高津新山遺跡の地形測量図及びグリッド配置図 …… 付図
第2図　高津新山遺跡の土層 …… 4頁
第3図　第04号住居址実測図 …… 6頁
第4図　第04号住居址カマド実測図 …… 7頁

第５図　第04号住居址出土遺物実測図（１）……７頁
第６図　第04号住居址出土遺物実測図（２）……８頁
第７図　第04号住居址出土遺物実測図（３）……９頁
第８図　地下式横穴第１号実測図……13頁
第９図　先土器時代の遺物……15頁
第10図　縄文時代の遺物（１）……15頁
第11図　縄文時代の遺物（２）……16頁
第12図　グリッド出土の土師器……16頁

図版目次

図版１　遺跡全景……21頁
遺跡近景……21頁
図版２　遺跡近景……22頁
調査風景……22頁
図版３　高津新山遺跡の層序……23頁
Ｈ－７－15グリッドにおける住居址の検出状況……23頁
図版４　第04号住居址……24頁
第04号住居の土層……24頁
図版５　第04号住居遺物出土状況……25頁
第04号住居址掘り方……25頁
図版６　第04号住居址カマド……26頁
第04号住居址出土遺物　１……26頁
図版７　第04号住居址出土遺物　２……27頁
図版８　第04号住居址出土遺物　３……28頁
図版９　地下式横穴第１号……29頁
地下式横穴第１号……29頁
図版10　先土器時代の遺物……30頁
縄文時代の遺物　１……30頁
図版11　縄文時代の遺物　２……31頁
グリッド出土の土師器……31頁
図版12　鉄滓と鞴羽口……32頁
中世の遺物……32頁

第Ⅰ章　調査の概要と経過

1　調査の概要（第1図）

昭和52年八千代市都市部より無計画な宅地代をさけようと、高津新山遺跡周辺の地域を、都市計画事業の一環としての「区画整理事業を計画したい」旨の連絡が、文化財保護法57条3によりあり、千葉県教育委員会との3者で協議が重ねられてきた。その後、事業計画は進歩をみなかったものの、個人の宅地化が進行する中で、昭和55年に都市部より確認調査の実施依頼を受けた。市教育委員会も本遺跡の範囲・性格を把握し、保存策を講じる基礎資料を得ることを急務として、県教育委員会と協議し、国庫補助・県費補助事業とし、昭和56年度より確認調査を実施している。

昭和56年度の調査は調査対象地の東側50,000㎡を実施し、はじめて本遺跡の性格の一端を把えることができた。その結果は先土器時代より中・近世の長い年月にわたって営まれた遺跡で、ことに奈良・平安時代の集落址がその形成主体をなすことであった。遺構も覆土に貝層を有する住居址・土壙をはじめ、数多く検出され、さらに調査区西側へ広がることが把えられた。特に集落址の限界が、西側へのびており、それを把えることが必要とされるに至った。

このため昭和57年度に再度補助事業として、対象地の南西部の確認調査を実施するに至っている。このことにより奈良・平安時代の集落址限界の南西部の限界を把えることが可能であると考えられ、また先土器時代・縄文時代の遺物出土においても、それが局地的であるかどうか判断する資料が得られると思われるからである。

なお、調査結果（57年度）については以下のとおりであるが、56年度調査については同年の概報を参考にされたい。

2　発掘調査の方法（第1図）

今年度の確認調査は前年度の調査の成果と方針を基本的に踏まえて実施し、継続される確認調査の一貫性を保ちつつ、統一的な遺跡の把握に努めた。

対象区域は前年度の調査区域の西側になり、K区を境いにし、北側は7区の中央ラインを境いにした区域である。第1図のアミをかけている区域は前年度の調査区域である。

区域内には未承諾地があり、前年度と同様に試掘グリッドを設定することは困難であった。そのため変則的な設定を行い、また可能なかぎり、検出された住居址の周辺を拡張し、住居址の形状の把握に努めることにした。試掘グリッド設定の基準線は前年度の基準線を用い調査区域内に延長している。

今回、調査を実施した遺構は第04号住居址と地下式横穴第1号である。第04号住居址は4分割

で発掘を実施し、土層の堆積状況の観察、また遺物の出土状況の実測を行っている。またカマドは煙道と火床を通るセクションラインを基本に4分割している。地下式横穴第1号は中心を通るラインを基準線に方眼を組み実測を行い、天井部の実測は順に10cm単位で天井を撤去しつつ実施されている。

先土器時代の確認は台地上平坦面で4グリッド分を調査している。

3　調査の経過

本遺跡の今年度の確認調査は、昭和57年12月1日より、昭和58年3月1日まで実施された。今年度の対象面積は26,800㎡であり、未承諾地もあり、また伐採の困難な区域も含まれているため、実際に発掘調査の可能な区域はきわめて少ない。試掘面積は3779㎡に達し全対象面積の14.1%である。試掘グリッド総数は200ヶ所である。

調査は当初、昨年度設定された基準杭を今年度対象区域に延長し、試掘グリッドの設定より始められた。試掘は収穫の行なわれている畑より順に実施し、遺構の確認作業も随時行なわれている。第04号住居址の調査は昭和58年1月から2月にかけて、地下式横穴第1号は昭和58年2月に実施している。また昨年同様に今回の調査区域も全面が耕作地であるため昭和58年2月16日より埋め戻し作業を行う。

一方、出土資料の整理作業も実施している。

4　日誌抄

57年11月18日（木）

昨年度設定した40m単位の基本杭の大半が耕作等により抜かれており、動いていない確実なものを基点に裾え対象区域に延長する。

57年12月1日（水）

現場事務所にて調査参加者と調査等について打ち合わせを行う。作物の収穫されている一部分の畑より設定された試掘グリッドの発掘を開始する。

陶器等の遺物を出土するも本遺跡の主体となる時期のものはわずかである。遺構等も検出されていない。ローム面までは20～30cmと比較的浅いが耕作時のうねなどの攪乱を相当に受けている。

57年12月3日（金）

台地上面での現在可能な区域の調査を終え斜面部の試掘へと移動する。台地上面の西端（通称鉄砲山）の崖下はローム面まで深く1mを越す。

台地上面の西端F－10－11グリッドより住居址を確認する。住居址の北側の一部が検出され、焼土や粘土などが多量にみられカマドと想定される。

57年12月25日（土）

Ｂ－11－２、７グリッドの試掘。Ｊ－９－３、４グリッドの両方にまたがる住居址を検出する。土師器、須恵器を出土する。焼土などを検出するもののカマドと考えられる地点は不明である。

Ｇラインのセクショントレンチ掘りを行う。表土（耕作土）の下は直にハードロームが出ている。ソフトロームの分は削られているものと判断される。

58年１月10日（月）

Ｈ－10－９、12グリッドにて北側にカマドを付設する住居址を検出、住居址全体の調査を実施することに決める。そのため、周辺グリッドの拡張を行う。

58年１月26日（水）

第04号住居址は床面検出のための全面発掘を行い、焼土や柱の部分の炭化材の検出が多くなる。またカマド近くの床面から三枚の坏が重さなって出土し、甕や甑などの一括出土も多い。

先土器時代の確認のため試掘グリッド（Ｆ－９－９）より地下式横穴らしきものを確認する。天井部が部分的に崩壊してしまい、内部が中空になっていることが判明する。そのため、放置することができないと判断し調査を実施することとする。

58年２月11日（金）

グリッド試掘作業を行う。第04号住居址の壁面と周溝の検出作業を行う。壁面の一部には焼土化している部分があり、焼失家屋であることはまちがいないだろう。床面の確定と同時に柱穴の確認作業を行うが検出されず。

58年２月16日（水）

地下式横穴の西側を拡張し実測の準備を行う。部分的に作物の収穫された畑のグリッドの発掘とＧラインなどの調査の行なわれているグリッドの埋めもどし作業を平行して進行する。

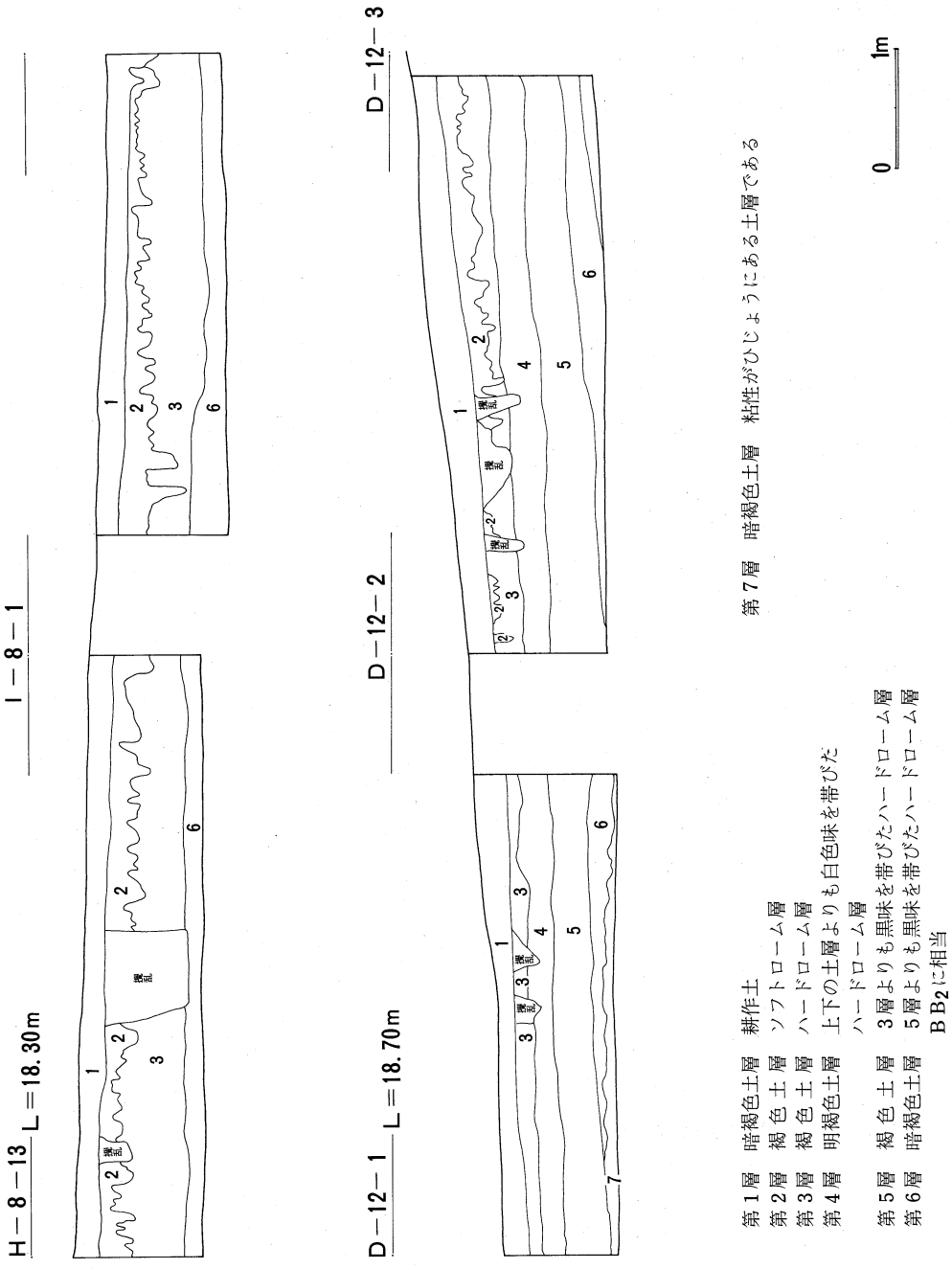
58年３月１日（月）

第04号住居址の写真撮影を行い調査を終了し全面的に埋めもどし作業を行う。

5　高津新山遺跡の層序（第２図・図版３）

今回調査の行なわれた区域は本遺跡の両端に位置しており、本遺跡の立地する台地でも比較的に比高差のある台（通称鉄砲山）をも含む。この台の西側は急激な傾斜をもち、当初は削平されたものと考えられたが、台の下での遺物の出土状況をみると別な意味合をもつとも思えた。しかし、台を通るようにグリッドを設定することができず不明である。

土層の堆積状況は昨年度の調査において報告された状況と大きな変化はないが、今回は黒色帯（ＢＢ２）までロームを掘り下げており堆積状況の明瞭な断面を図化した。



第2図　高津新山遺跡土層図（1/60）

第II章　遺　　構

今回の調査で検出された遺構は総数で107基であり、遺構別には竪穴住居址10軒、土壙70基、溝状遺構27条、地下式横穴１基を確認している。

本遺跡の中央をのびる浅い谷は今回未調査域ではあったがＩ－11区周辺にまで至すると予想され、住居址の分布も、この谷を周ぐるように位置していることが再確認された。

また土壙の分布は台地上の平坦面ではＨ－12区より東側に、西側斜面部ではＢ－９区周辺に比較的多く存在している。最西端では縄文土器の出土も密集しており、これら土壙との関連を予測させるものである。

1　第04号住居址（第３、４図・図版）

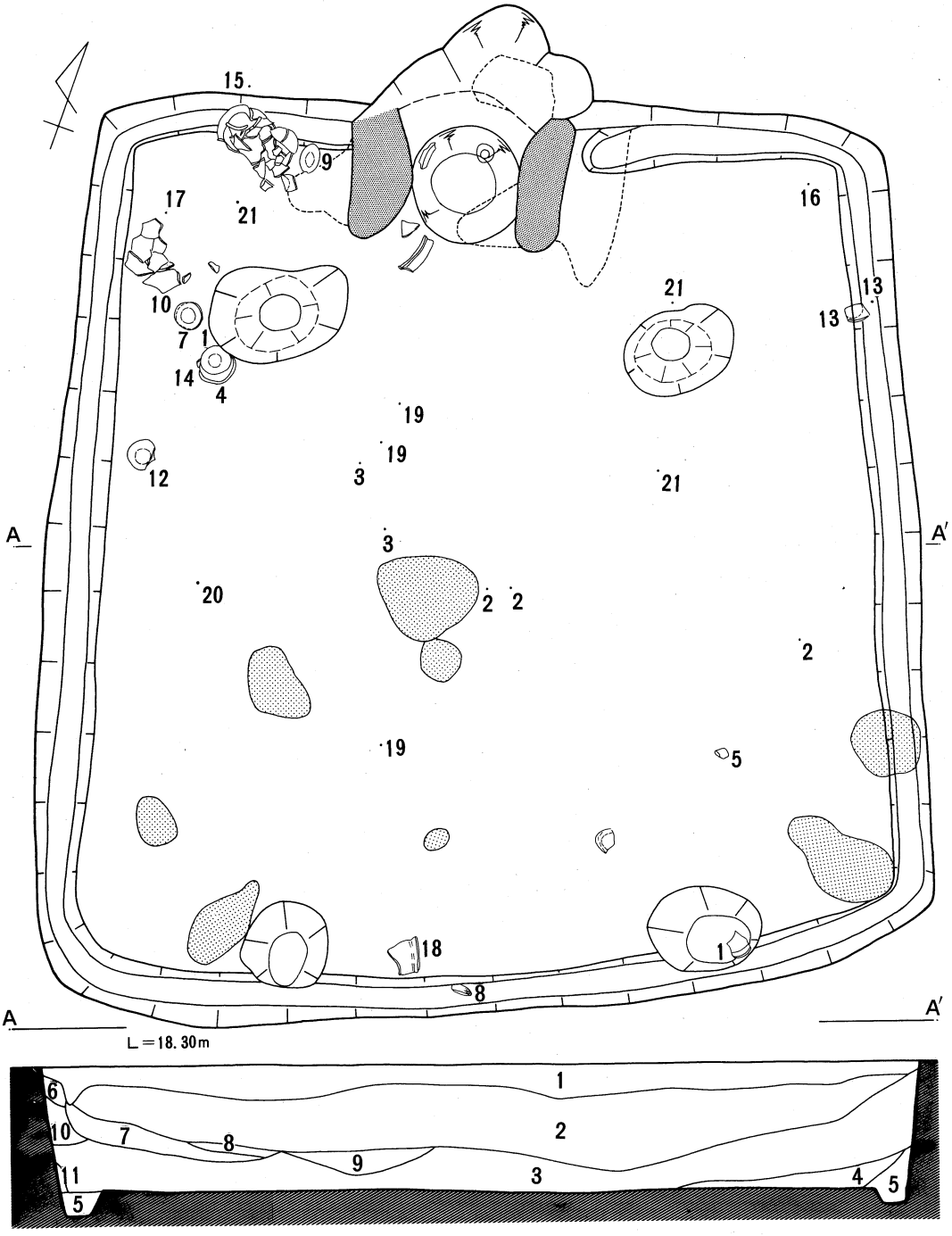
本住居址は台地上の平坦面にあり、浅い谷の先端部付近と考えられるＨ－10－12～Ｈ－11－９グリッドに位置している。表土下30cmのソフトローム上面において確認された。耕作等による攪乱は比較的少なく、遺存状況は良好である。

本住居址の形状は台形であり、北壁が若干南壁よりも短い。さらに南壁はわずかにふくらみをもつ。中軸線での計測で南北方向４ｍ５cm、東西方向３ｍ78cmを計る。主軸はＮ－19°－Ｗ。

壁高は約60cmと深く掘り込んでおり、床面は硬く踏みかためられた状態で検出されている。カマド周辺は特に硬い状態である。床面を形成する層は黒褐色土が多く、多量の炭化材や焼土粒子を混入している。周溝は壁の直下に掘り込まれており、カマドの部分を除き全周している。幅12～20cm、深さ２～10cmを計る。周溝の外縁部分には比較的やわらかい暗褐色土層があり、内側にはロームによる充填が行なわれている。柱穴は床面検出時点では北東隅側に位置するpit1が部分的に検出されたのみであったが、他の柱穴は全く検出されていない。床面を撤去し掘り方を確認する段階においてpit2～３が検出された。どの柱穴も中心に暗褐色土の比較的軟弱な部分があり、周囲にロームブロックを多量に充填している。深さはpit１が62cm、pit２が64cm、pit３が56cm、pit４が56cmを計る。

住居址内部には床面直上で多量の炭化材を検出し、上屋の焼失状況を良く遺存している。また焼土ブロック（第３図スクリーントーンの部分）も図示した状態で堆積している。

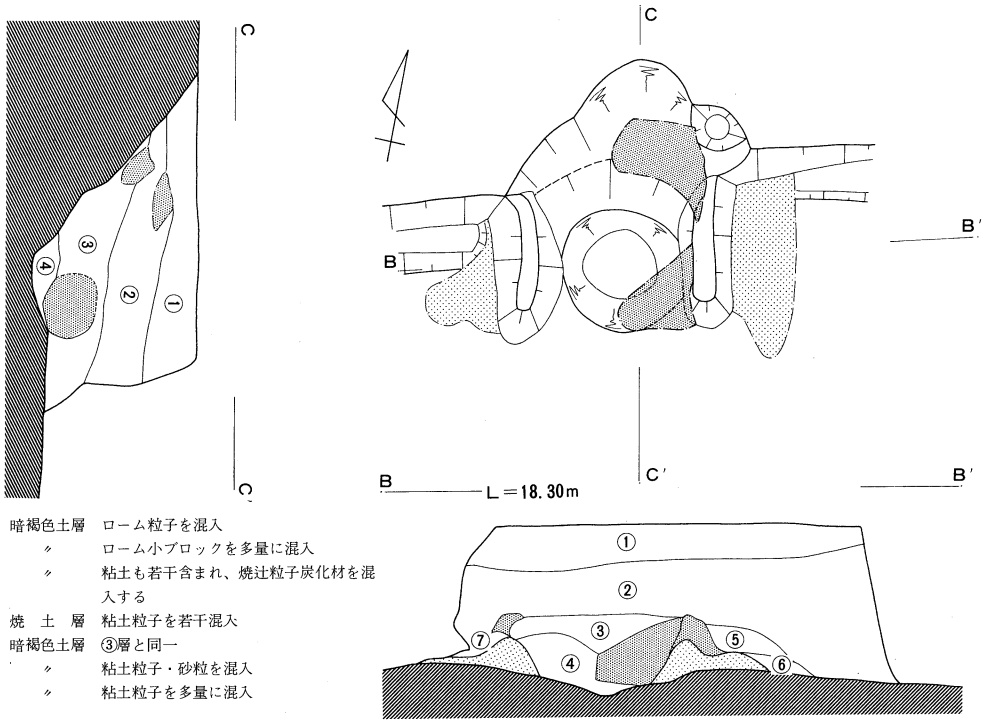
カマドは北壁のほぼ中央に位置しており、天井部の遺存など比較的良好な遺存状況である。火床は壁の直下に掘り込み、直径50cmの円形を呈し、深さ10cmを計る。煙道は壁面を急傾斜で掘り込んでいる。袖は煙道の掘り込みの端より60cm程の長さで粘土と砂により構築している。また濃いスクリーントーンの部分（第４図）は天井部の遺存であり、崩壊し焚口をふさいだものと考え



第1層	暗褐色土層	ローム粒子を混入
第2層	〃	ローム小ブロックを多量に混入
第3層	〃	炭化材の混入が多量
第4層	〃	ロームブロックを混入する
第5層	褐色土層	ロームブロックを多量に混入
第6層	暗褐色土層	ローム小ブロックを混入
第7層	暗褐色土層	ローム小ブロックを混入、焼土粒子を含
第8層	〃	ローム小ブロックを混入し、色調が若干暗い
第9層	〃	褐色土を混入
第10層	褐色土層	ローム小ブロックを混入
第11層	〃	ロームブロックを混入し、焼土粒子も含

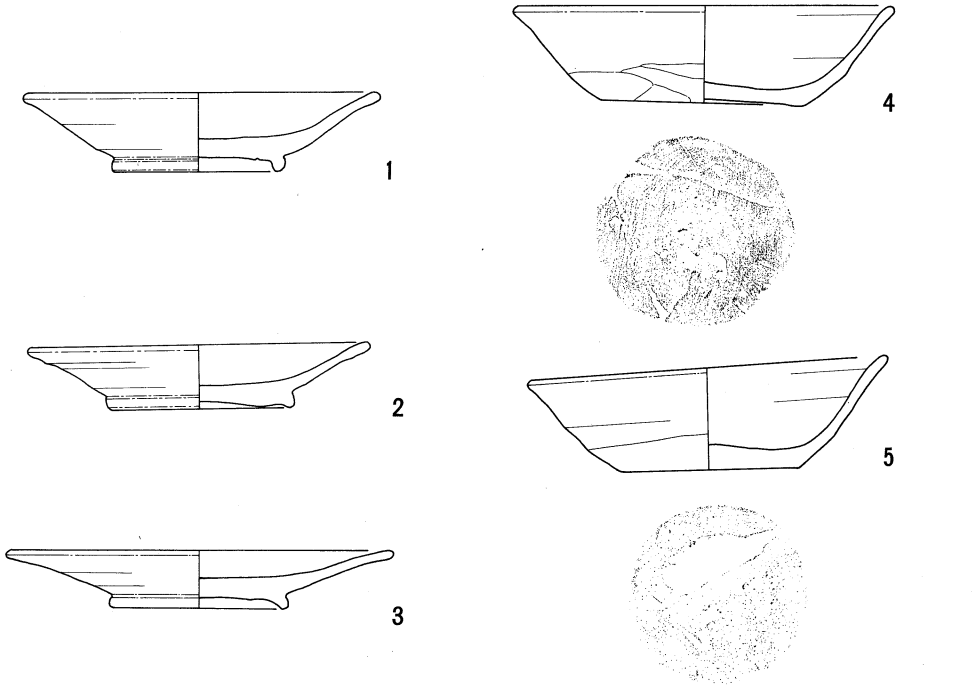
第3図　第04号住居址実測図（1/30）

0　50cm

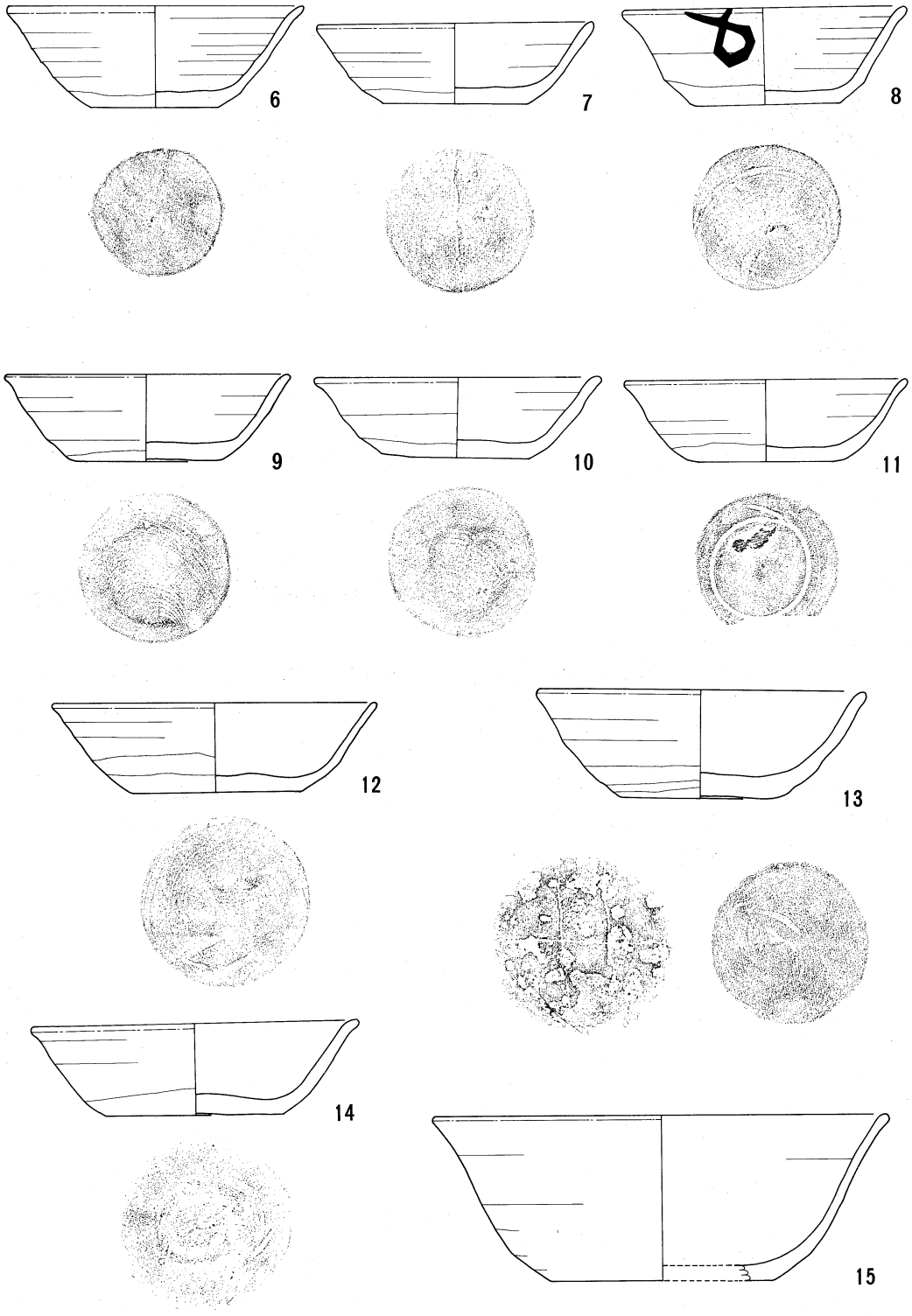


①層　暗褐色土層　ローム粒子を混入
②層　〃　ローム小ブロックを多量に混入
③層　〃　粘土も若干含まれ、焼辻粒子炭化材を混入する
④層　焼　土　層　粘土粒子を若干混入
⑤層　暗褐色土層　③層と同一
⑥層　〃　粘土粒子・砂粒を混入
⑦層　〃　粘土粒子を多量に混入

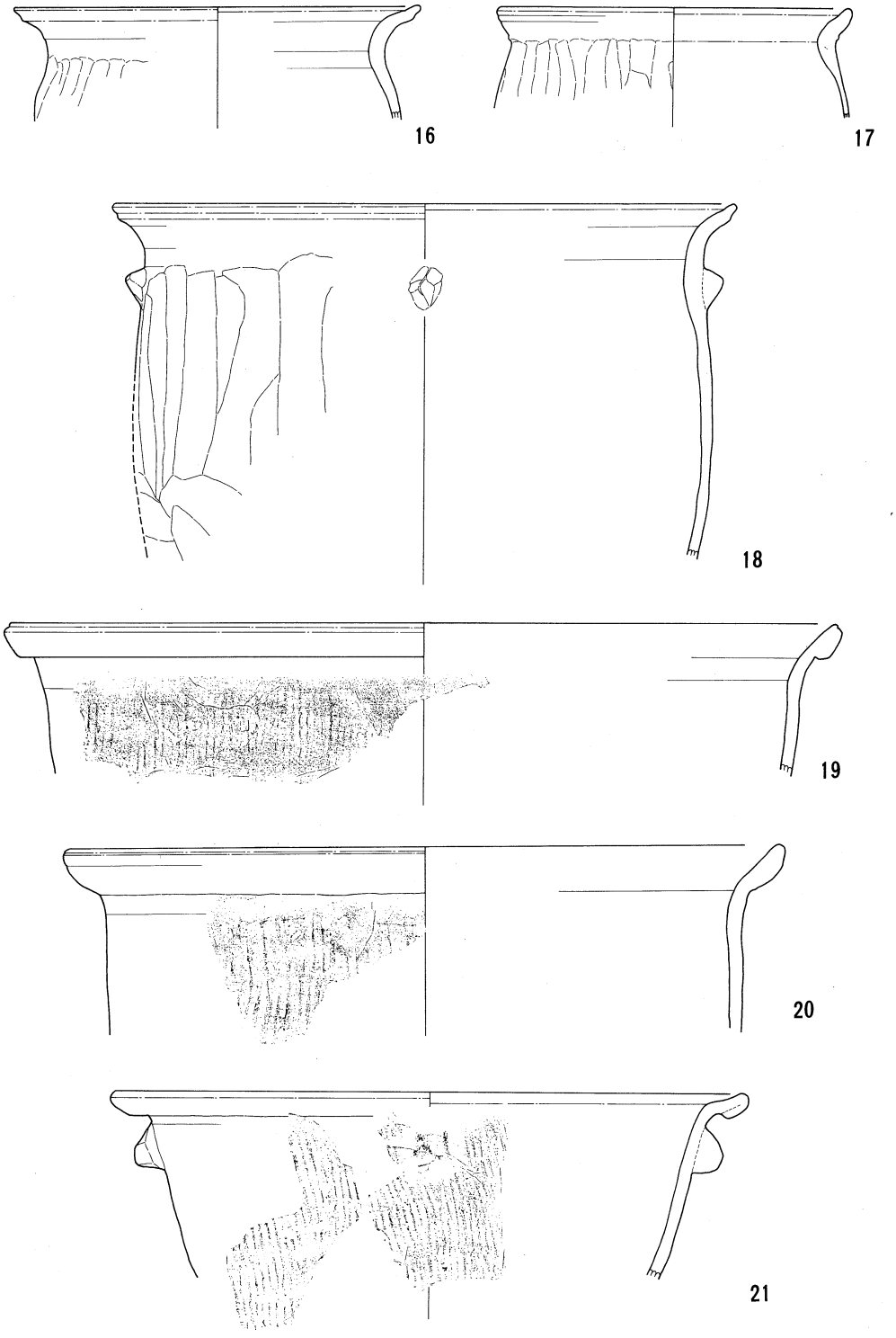
第４図　04号住居址カマド実測図（1/30）



第５図　第04号住居址出土遺物実測図１　(1/3)



第６図　第04号住居址出土遺物実測図２（1/3）



第７図　第04号住居址出土遺物実測図３（1/3）

られるが、火を相当受けており、硬化した状態で検出されている。焼土の堆積は火床内に充満している。

出土遺物（第５～７図・図版６～８）

本住居址の出土遺物はひじょうに多く、総点数で1100点を越すものであった。完形土器の出土量も多く、今回は全部を掲載することはできなかったが、特に特徴的なものを中心に図化した。図化されなかったものでは管状土錘・紡錘車などの土製品の出土もみられる。さらに鉄滓や鞴羽口など製鉄址に関連したものも多く、特に刀子・鉄片の鉄製品の出土も多い。

甕・甑・坏形土器などの完形品の一括出土はカマド周辺に多くみられるのが特徴的である。以下図化土器の説明をする。

１は土師器の高台付皿であり、pit４の上方から出土している。回転糸切りによる切り離し後、高台部を貼り付け、その両側をヘラ状工具により整形する。内面は体部を横位に、底部を四角形を描くようにミガキをかけている。胎土には雲母など細砂粒を混入する。

２は土師器の高台付皿であり、住居址中央付近より破片で出土している。ロクロ成形後高台部分を残して回転糸切りし底部外縁を強くナデて高台としている。体部はゆるやかに外傾しており、体部中位で器厚を減じ　口縁で再び増す。内面は体部を横位に、底部には一方向にミガキをかけている。胎土には石英・雲母など細砂粒を混入する。

３は土師器の高台付皿、住居址中央に破片で出土している。ロクロ成形後、底部に粘土紐を貼り付け高台とし、両側をナデにより整形する。底部中央には回転糸切り痕が残る。内面は体部で横位に、底部を十字方向にミガキを全面にかける。胎土には石英・雲母などの細砂粒を混入する。

４は土師器の坏であり、pit２の南西側の床面上に坏が三枚重さなって出土しており、そのいちばん下のものである。器形は底部より内弯気味に立ち上がり、口縁でわずかに外反する。ロクロ成形後、底部外縁と体部下半を手持ちヘラ削りにより整形。底部中央には回転糸切り痕が残る。胎土には雲母・石英などの細砂粒を混入する。

５は師器の坏であり、住居址の南東隅側に出土している。ロクロ成形後、底部全面と、体部下端を回転ヘラ削りにより整形する。内面は体部に横位から斜位に、底部では一方向にミガキをかけている。胎土に雲母などの細砂粒を混入する。

６は土師器坏であり、４と同じ位置で出土しており、三枚重ねの最上段のものである。体部内外面に明瞭にロクロ成形時の凹凸が残る。底部全面と体部下端に回転ヘラ削りによる整形を行う。胎土には石英などの細砂粒を混入する。

７は土師器の坏であり、pit２の西側から出土し、二枚重さなった上段のもの。底部全面と体部下端を回転ヘラ削り。胎土には２㎜大の砂粒と石英・雲母などの細砂粒を混入している。

８は土師器の坏であり、南壁の壁際中央付近からの出土。ロクロ成形が比較的に良く残り、ま

た切り離し後の底部全面と体部下端を回転ヘラ削り。器形は底部から急角度で立ち、口縁で外反する。口縁部から体部にかけて墨書で書かれている。意味は不明。胎土には細砂粒を混入する。

9は土師器の坏であり、カマド西側の床面より出土している。ロクロ成形後回転糸切りし、さらに底部外縁と体部下端を回転ヘラ削りにより整形を行う。底部には焼成後の「キ」状のヘラ描きがある。胎土には細砂粒を混入する。

10は土師器の坏であり、7と同じ位置から出土し、二枚重ねの下段のものである。回転糸切りによる切り離し後、底部外縁と体部下端を回転ヘラ削りする。底部には焼成後の「キ」状のヘラ描きがある。胎土には石英・雲母などの細砂粒を混入する。

11は土師器の坏であり、半完形で出土している。ロクロ成形し、切り離し後底部全面と体部下端に回転ヘラ削りが行なわれる。胎土には1㎜大の砂粒と石英・雲母などの細砂粒を混入する。

12は土師器の坏であり、西壁中央付近の壁近くからの出土である。ロクロ成形し、切り離し後、底部を全面回転ヘラ削り、さらに体部下半を2段にわたり回転ヘラ削りする。内面は全面ミガキがかけられている。胎土には雲母などの細砂粒も混入する。

13は土師器の坏であり、東壁の壁際、北東隅寄りの地点から出土している。切り離し後、底部全面と体部下端を回転ヘラ削りする。体部には幅広く行い、ヘラ削りの中に帯状にロクロ成形痕が残る。内面には全面ミガキを行なっている。さらに内面底部に焼成後の「キ」状のヘラ描きがある。胎土には石英・雲母などの細砂粒を混入する。

14は土師器の坏であり、4と同じ位置から出土しており、三枚重ねの真中のものである。ロクロ成形後回転糸切りし、底部外縁部と体部下半を回転ヘラ削りする。内面には全面ミガキ。底部外面には「キ」状のヘラ描きが有る。胎土には1㎜大の砂粒と雲母などの細砂粒を混入する。

15は土師器の埦である。カマド西側壁上端からの出土である。ロクロ成形しており、底部の切り離し技法は不明であるが、後にヘラ削りを行なう。体部下半には二段に回転ヘラ削りを行なっている。胎土には雲母・石英などの細砂粒を多量に混入する。

16は土師器の甕である。北東隅からの出土。口縁は外反して開き、口唇部で段をもって外反する。口縁部はナデにより整形され、胴部は縦位のヘラ削り。胎土には石英などの細砂粒を混入。

17は土師器の甕である。北西隅からの出土。頸部より外反気味に短く立ち、口唇部でわずかに内側に屈曲する。口縁部はナデにより整形され、胴部は器厚調整のための縦方向のヘラ削りを行なっている。そのため、胴部の器厚はきわめて薄く2～3㎜程である。胎土には雲母などの細砂粒を多量に混入する。

18は土師器の甕あるいは甑である。南壁際の中央よりややpit3寄りの地点から出土している。口縁部は頸部より外反して立ち、さらに口唇部において段を有ずる。口縁はナデにより整形される。胴部は長胴風であり、上半部では縦方向のヘラ削りを行い、中位で斜方向に変わる。把手を

頸部下に有し、4単位のものと推定される。胎土には多量の石英雲母などの細砂粒を混入する。

19は土師器の甕である。住居址中央より破片で出土する。口縁部は外傾して立ち上がり、口唇部で外側に粘土を貼り付けている。内外面ともナデにより整形される。外面にはタタキにより整形を行う。胎土には砂粒を多量に混入している。

20は土師器の甕である。住居址西側中央付近において破片で出土している。口縁は頸部より外反し、さらに外側に粘土を貼り付ける。内外面ともナデにより整形される。胴部は垂直に立っており、長胴になる。タタキにより整形されている。胎土には細砂粒を混入する。

21は須恵器の甕あるいは甑である。カマドの南側において破片の状態で出土している。口縁部は頸部から外側に屈曲し、さらに口唇部で外側に折り返している。胴部は底部に向ってすぼまる形態をしており、外面はタタキによる整形である。胴部上端には粘土塊の把手を貼り付けている。

2　地下式横穴第1号（第8図　図版9）

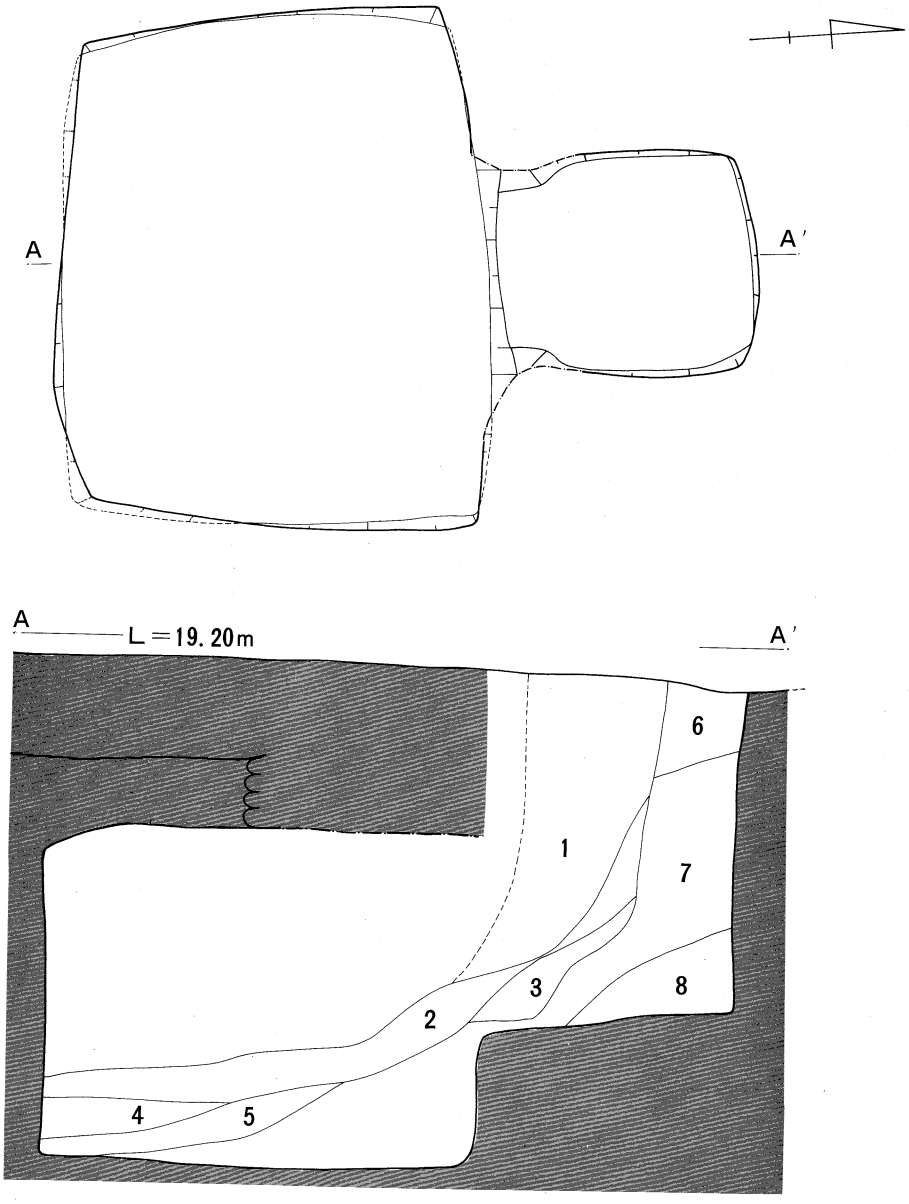
先土器時代の確認作業を一部実施しているときに、天井が崩壊してその所在が認められたもので、F9－5・9グリッドにわたって検出された。表土除去後の遺構確認では、入口部に攪乱があり、不明瞭であった。表土層は20～30cmであり、耕作によってソフト・ローム層も攪乱を受けており、表土、ハード・ローム層の2層が把えられるだけである。

地下式横穴の横穴部の平面プランは、中心線でみると長軸2m02cm×短軸1m68cmを測る、いく分北側に広がる台形状である。横穴高は1m33cmで、天井厚（ハード・ローム）は68cmであった。壁面には先端が丸味をおびた工具の掘削痕が残るもので、ていねいな作業を行っている。

入口部は横穴の北側央部に設けられており、横穴部との接続部は攪乱をうけているが、ほぼ1mの方形で、1m42cm垂直にハード・ロームを掘り込んでいる。段差を有して横穴底に続き、段差は55cmを測る。

堆積土層は殆んどが攪乱による表土流入土であるが（1層～3層）、4層・5層はローム粒・炭化物を含むしまりのある層で（黒褐色土：含有物の多少により分層）であり、いずれも遺構に伴うものとは考えられなかった。6層～8層はローム粒の充填層で、6層は硬めた状態であった。また6層～8層については入口部を閉鎖する状態で充填されたと考えられる層で、7層は層の硬度がいく分弱く、5mm位のローム粒が主体で、横穴部へ流入していた。

遺物は遺構に伴うものは認められず、流入土から陶磁器片が若干出土したのみである。そのため時期・用途は不明であり、本遺跡内の資料増加をまちたいが、谷津をへだてた西側の台地に高津館跡が所在しており、これに関連するものではなかろうか。



第1層　褐色土層　ロームの再堆積土
第2層　〃　色調やや暗褐色、しまりに欠ける
第3層　〃　ロームブロックの層粘性有り
第4展　暗褐色土層　ローム粒子を混、しまりのない撹乱による崩壊土
第5層　〃　4層よりもローム粒子は減少
第6層　暗褐色土層　やや黒っぽく、ローム粒子を多く混入
第7層　〃　6層に比べロームブロックの大きなものが混入

第8図　地下式横穴第1号実測図（1/30）

0　50cm

第Ⅲ章　グリッド出土遺物

1　先土器時代の遺物（第９図・図版10）

先土器時代の遺物と考えられるものは、剝片が２点出土しているのみである。

１は頁岩を素材とする剝片で、側縁部全面にリタッチが加えられている。２は安山岩を素材とする剝片で、全面に風化が著じるしい。

2　縄文時代の遺物（第９～11図・図版10、11）

土　器

縄文時代の遺物は、中期加曽利Ｅを主体とする土器がややまとまって出土し、これに前期・後期のものが少量伴なったにすぎない。

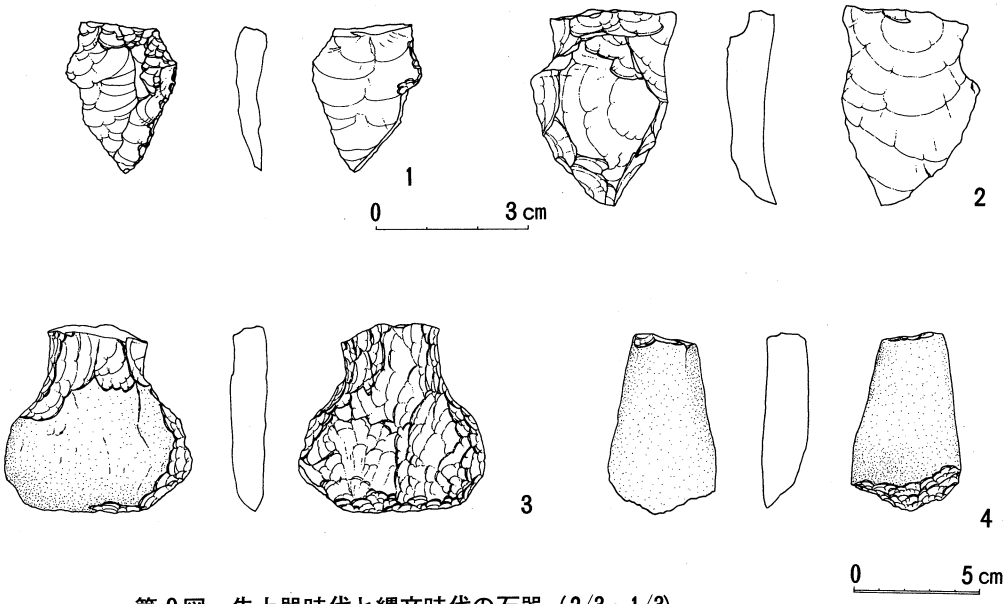
５・６は地文として撚糸を施した上に隆線による渦巻文を配し、口縁部文様帯を形成するものである。８はゆるく外反する口縁に２本の比較的太い沈線によって区画された無文部をもち、頸部以下の円筒形と考えられる胴部に垂下する沈線と縦の撚糸による磨消縄文が施こされた土器である。また９は８と同様の器形をとると思われるが、無文部がなく、ゆるい波状口縁の下に縦の撚糸のみが施こされているものである。10は８と同様に口縁部に２本の沈線による無文部があるが、頸部以下は縄文が施こされている。11は波状の大きな把手を口縁に配した深鉢形土器で、５・６同様隆線による渦巻文が口縁部文様帯につけられている。12は同じく深鉢形の土器の頸部破片で太い沈線によって区画された口縁と胴部の間に無文帯がかたちづくられている。また、口縁部文様帯の区画の巾は沈線によって充填され、胴部以下も縦の磨消縄文が施こされている。15～18はいずれも胴部破片であるが、15・16は粗い縄文の地文の上に太い沈線による曲線文が描かれ、17・18は縦の磨消縄文が施文されている。これらの土器は19を除いてその大部分が加曽利ＥⅠ式に属すると考えられるものであり、加曽利ＥⅠ式の中でも比較的古い段階に位置づけられる個体がみられる。また19は後期加曽利Ｂの粗製土器に類例が求められると思われる。

石　器

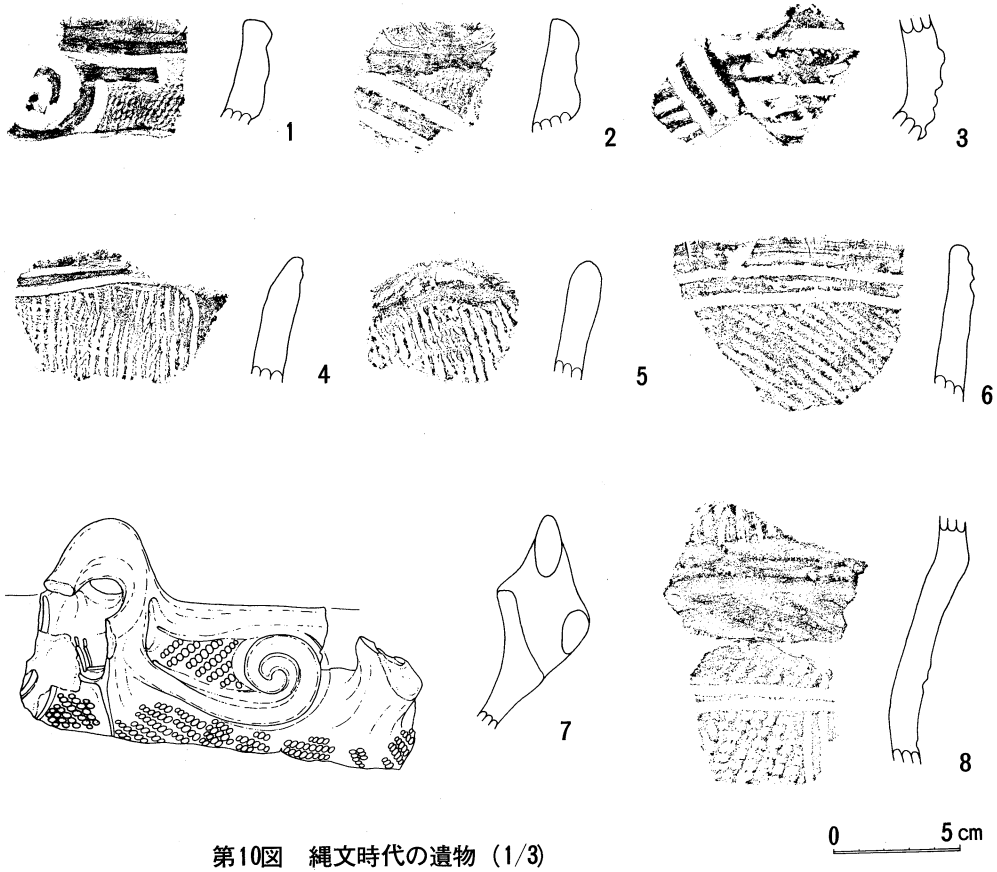
縄文時代に属すると考えられる石器は打製石斧の他、たたき石、礫器などが出土している。３は片面に自然面を残す緑泥片岩製の分銅形打製石斧で身部中央で折れている。４は砂岩の細長い自然礫の両端を加工した礫器で、片面からの簡単な加工によって刃部が作出されている。

3　グリッド出土の土師器（第12図・図版11）

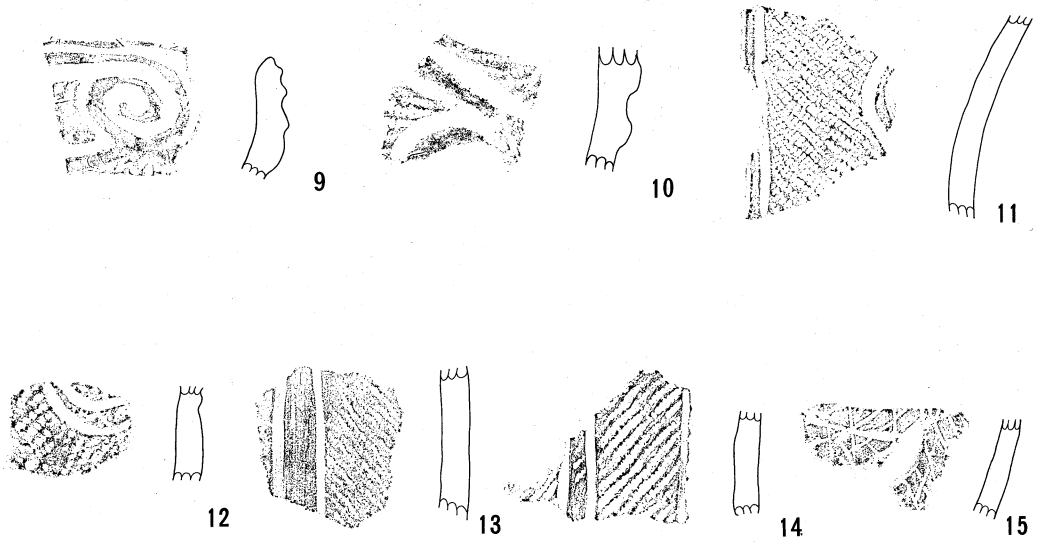
調査区域内において、土師器の出土は台地上の平坦面に多く出土しており、西側斜面部には減



第９図　先土器時代と縄文時代の石器（2/3・1/3）

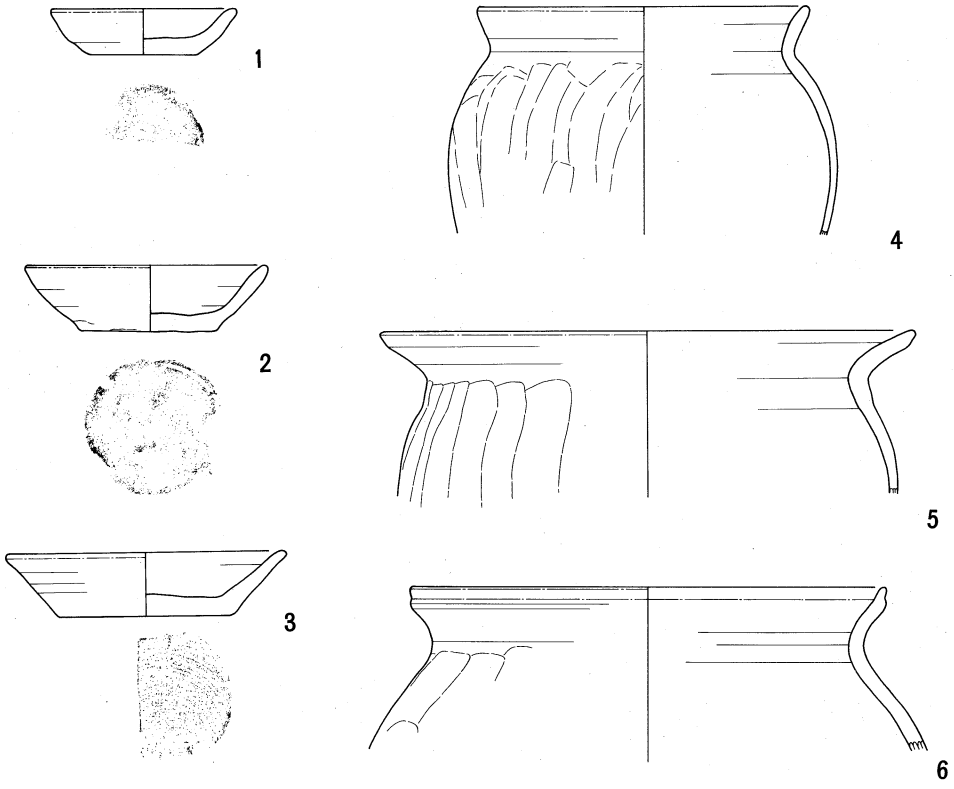


第10図　縄文時代の遺物（1/3）



第11図　縄文時代の遺物 2 (1/3)

0　5cm



第12図　グリッド出土の土師器 (1/3)

0　5cm

少する傾向をみることができる。

1は土師器の坏である。B－10－7Gより出土する。ロクロ成形後、回転糸切り。整形は全く加えられていない。底部より内弯して立ち上がり口縁に至る。細砂粒子を若干混入する。

2は土師器の坏である。B－10－7Gより出土する。底部からやや内弯気味に立ち上がり口縁に至る。回転糸切りにより切り離し、そのままである。雲母・石英など細砂粒の混入。

3は土師器の坏である。C－9－3Gより出土。底部より直線的に立ち上がり、口縁でわずかに外反・回転糸切り後、整形は加えられていない。

4は土師器の甕。I－12－3Gより出土。頸部以下縦方向のヘラ削りにより、器厚が3㎜程まで器厚調整される。口縁部はナデにより整形されている。

5は土師器の甕、H－7－15Gより出土。H－7－15、16Gより検出された住居址のカマド脇覆土中のものである。口縁は外反しており、口唇で段を有する。胴部はヘラ削りにより器厚を減。

6は土師器の甕、H－11－12Gより出土。口縁は外反気味に立ち、口唇で段を有する。内外面ともナデにより整形、胴部は縦方向のヘラ削りによる。胎土には砂粒を混入する。

4　鉄滓と鞴羽口（図版12）

I次調査では2点の鉄滓が出土していたが、いずれも表土層の単独の出土であったため、本遺跡に係るものかなお不明の点があった。今回の確認調査ではB－8区を中心に、量的差はあれ、多くの出土が認められた。また第4号住居址覆土及びその周辺からも出土しており、台地上平坦及び谷津に面する低台地と、立地の差はあまりなかった。鞴羽口片はやはり鉄滓に混じって出土しており、第4号住居址よりも出土をみた。推定口径は最大のもので、10㎜を越えると思われ、個体数は3点である。一部付着した鉄がかかっており、砂質のものであった。これらをみると確認調査では製鉄遺構及びそれに類するものは検出されなかったが、その存在の可能性を大きく示唆しているものと考えられる。

5　中世の遺物（図版12）

本遺跡において中世の陶器片は前回の調査も含め、比較的数多く出土している。特に今回西端のC・D－8・9区周辺には、他の遺物とともに出土しており、慎重な調査が望まれるところである。今回は代表的なものを示した。

1～5は大甕の破片である。1は濃緑色の釉がかかる。また5は茶褐色の釉がかかり、土器表面に斜めにヘラ状工具の痕跡を残している。6・7は鉢の底部。8～10はスリ鉢体部である。

第Ⅳ章　小　　結

高津新山遺跡の57年度（２年次）の確認調査の概要については、以上述べてきたとおりである。グリッド発掘によって広い対象地域の傾向、特に遺構把握を主目的とした調査であったが、未承諾地もあり、局地的に発掘した地区もあるなど、全体的な遺跡の把握はなお不充分ではなかったかと考えている。しかしながら竪穴住居址10軒、土壙70基、溝状遺構27条、地下式横穴１基という遺構検出の資料は、56年度確認調査結果の補強という面だけではなく、ある程度の成果を得たと考えたい。

出土遺物からは先土器時代から中近世へとわたる年月に本遺跡が営まれたことを示しており、遺構からは奈良・平安時代の集落址が主体を占めていることを語っている。その一方で集落址としては、なお精査を要するが、住居址検出の減少から、西限へと近づいたと考えられる。

先土器時代は出土石器は少なく、その傾向を把えることは困難であるがローム層中に包含されることが推察される。一部ハード・ロームを50cm程度下げているが、その確認密度は粗く、また一方でロームがこびりついたクレイクの出土をみるなど、明瞭でない。ブラックバンド迄下げてみる要があろうが、今回もその時間的余裕などなく、将来精査が必要であると考える。

縄文時代は中期加曽利Ｅ式の出土が目立っており、２次調査の縄文時代遺物の主体となる。遺構はグリッド調査内では認められなかったが、遺構を想定させる出土傾向であった。台地上の標高の高いところでは耕作によるためか、表土耕作土・ハード・ローム層の２層であり、包含層やソフトロームが削平されているため、失われた可能性もある。またＢ・Ｃ列の谷津に近接する調査区は包含層が深く、該期については56年度調査と同様、その傾向を同じくすると考えられる。

奈良・平安時代は竪穴住居址の殆んどがこの時期の所産と思われるが、４号住居址についてはこの期の一端を示すものと言えよう。「キ」のヘラ描き（焼成後）の土師器坏の多量の出土は所有者の印であるか不明であるが、焼成後のヘラ描きの多いことが昨年に引き続き指摘できる。また鉄斧・刀子・鉄滓の出土、鞴破片や紡垂車も出土しており、生活の姿をうかがうことができる。火災住居であるため遺物の遺存が多かったと考えられるが、住居址内の具体的な資料としては、この４号住居がはじめてであった。

鉄滓・鞴片の出土は住居内にとどまらず、Ｂ８区を中心として各区から多量に出土している。56年度調査では２点のみの鉄滓出土であったので、その傾向は製鉄遺構を想定させる。ただ４号住居出土の鉄滓は覆土中層が多いため、時期については不明である。

以上、２次調査の概要についてまとめてきたが、詳細な再検討は確認調査が全て終了した時点で行いたい。そしてなお正確な資料を得るため、残り部分についても調査を必要と考える。

図　　版

図版1

遺跡全景

遺跡近景

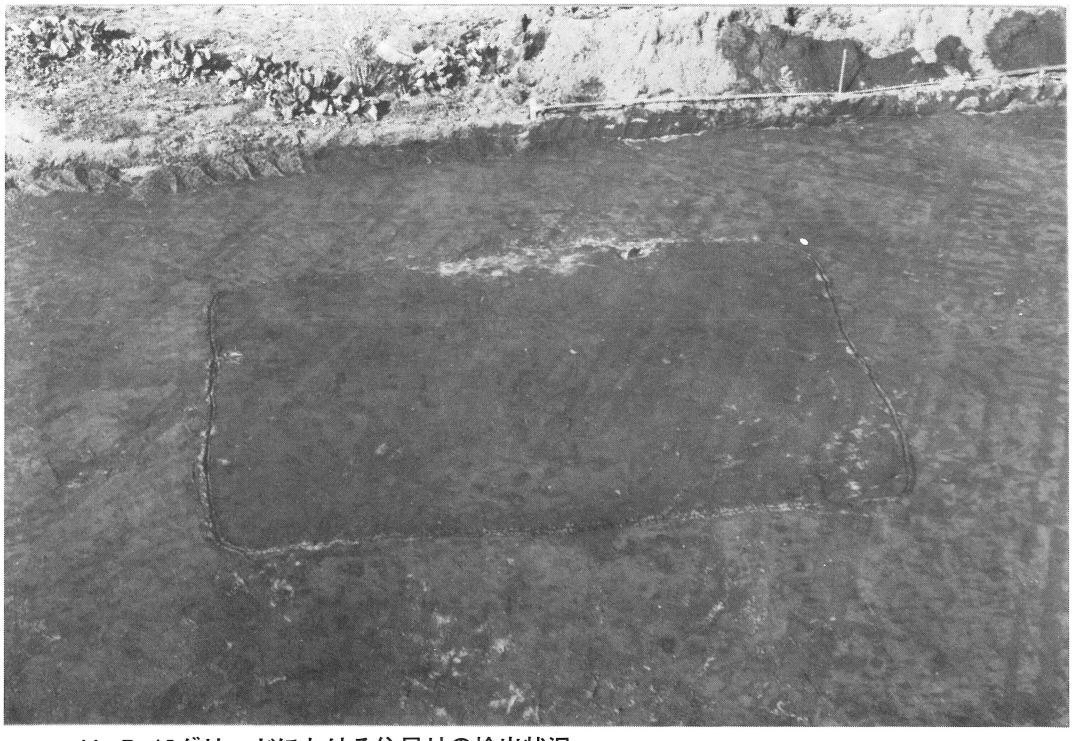
図版2

遺跡近景

調査風景

図版3

高津新山遺跡の層序



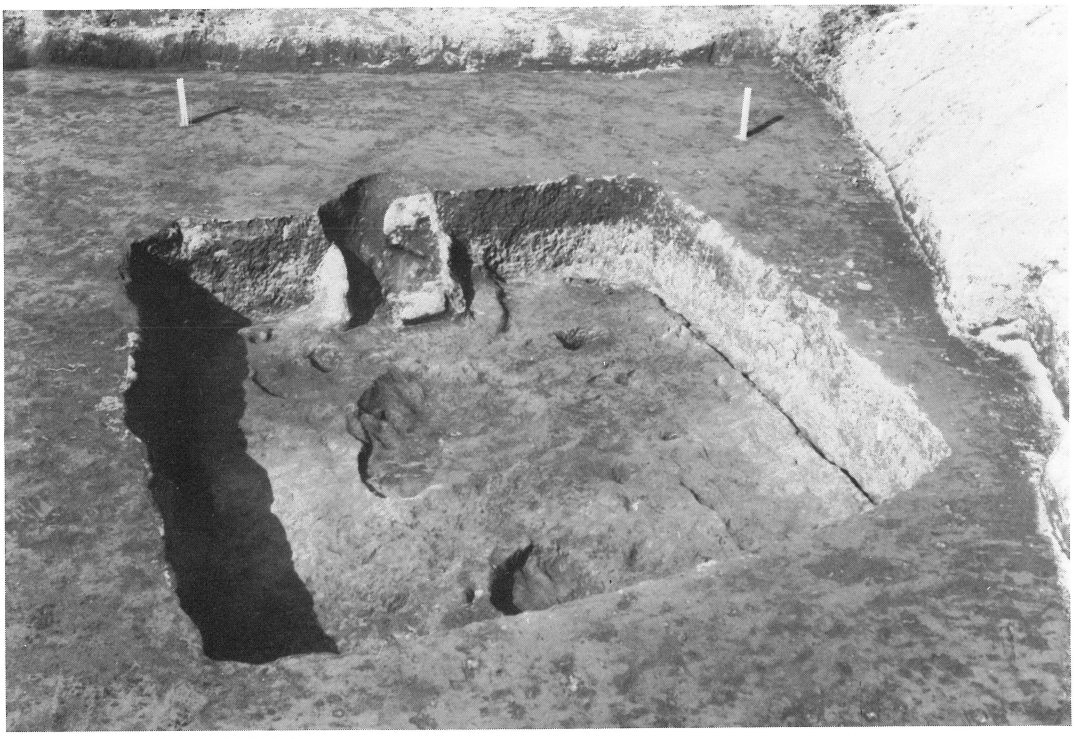
H－7－15グリッドにおける住居址の検出状況

図版4

第04号住居址

第04号住居の土層

第04号住居址遺物出土状況

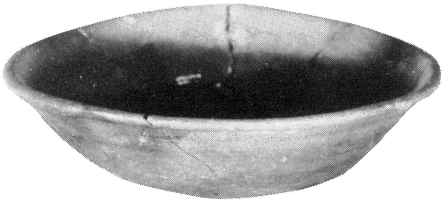


第04号住居址掘り方

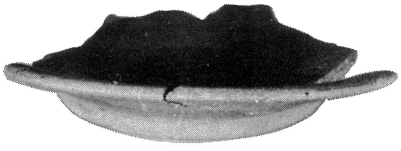
図版6

第04号住居址カマド

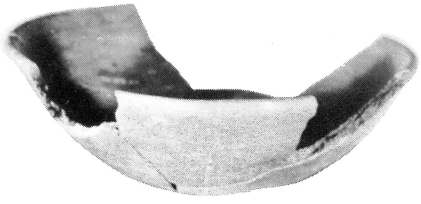
1



4



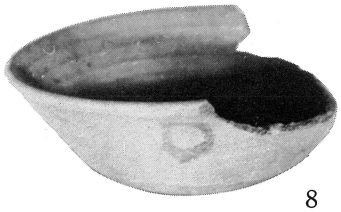
2

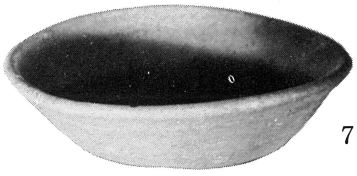


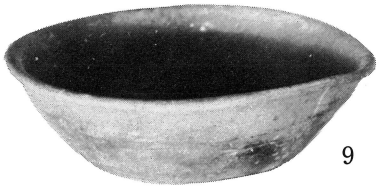
5

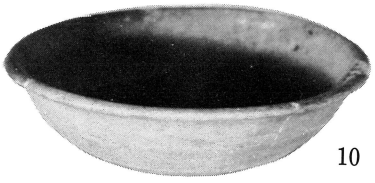
第04号住居址出土遺物 1

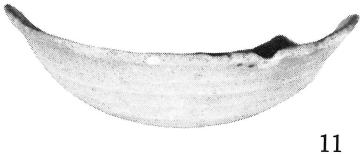
6

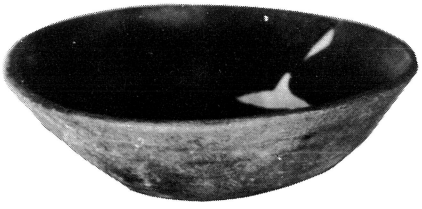

8


7

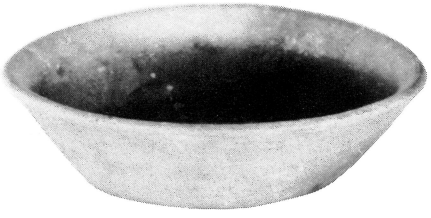

9


10


11

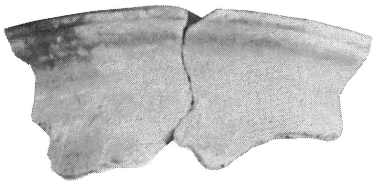

12

13

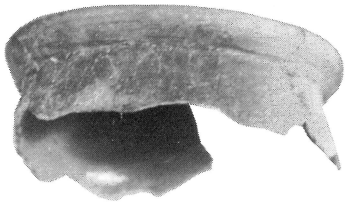

14

第04号住居址出土遺物 2

図版8

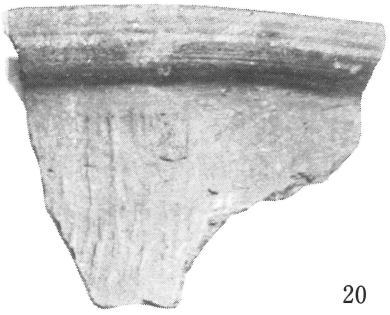


16

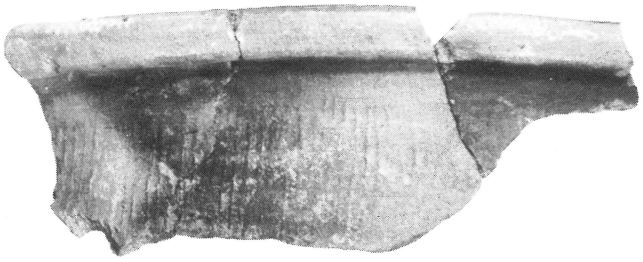


17

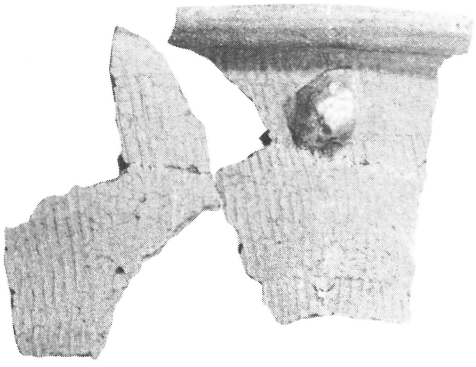
18



20

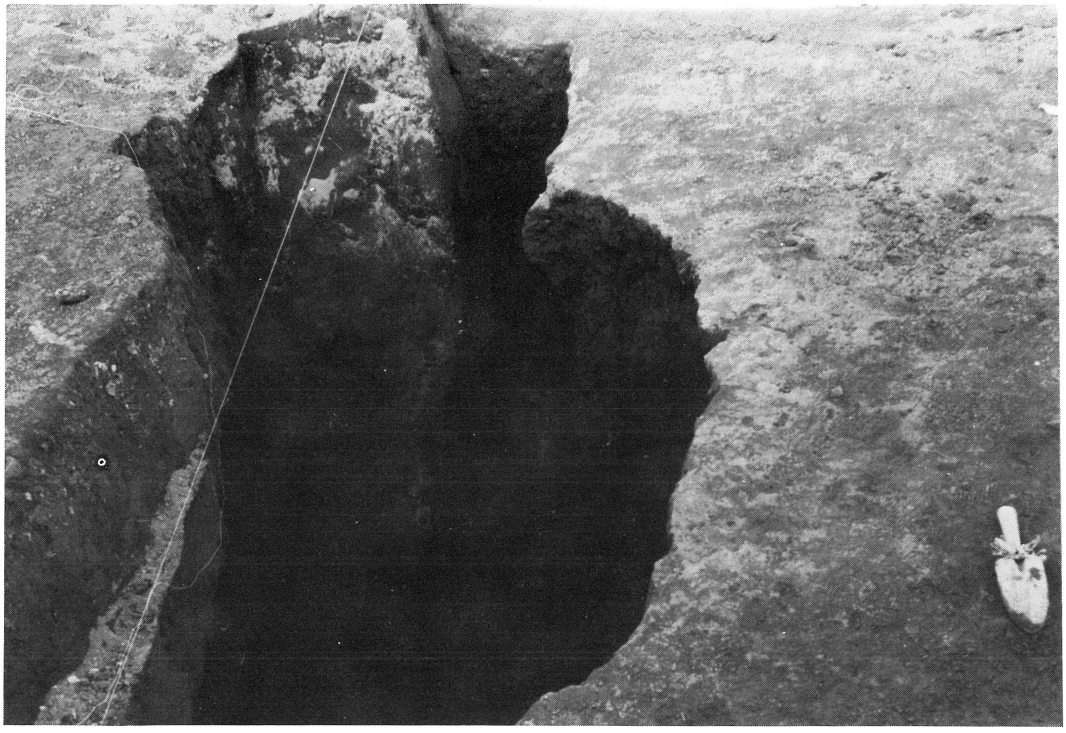


19

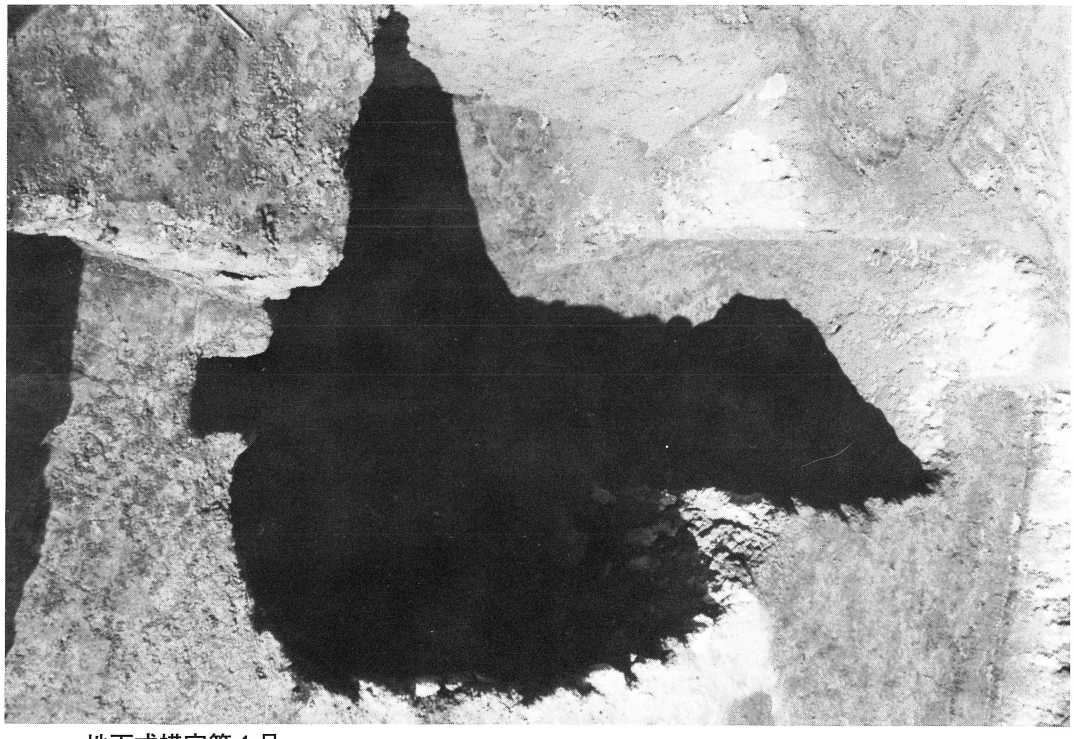


21

第04号住居址出土遺物 3

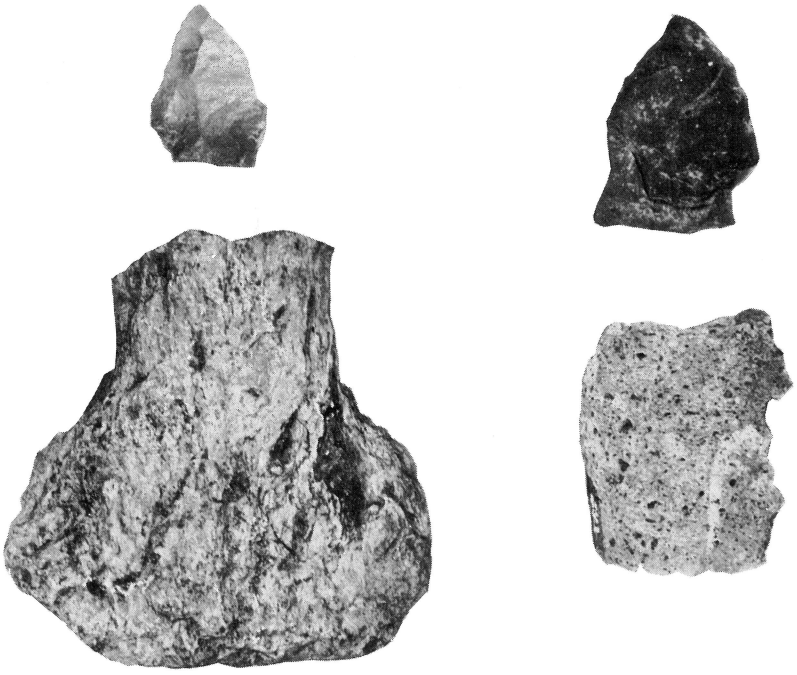


地下式横穴第１号

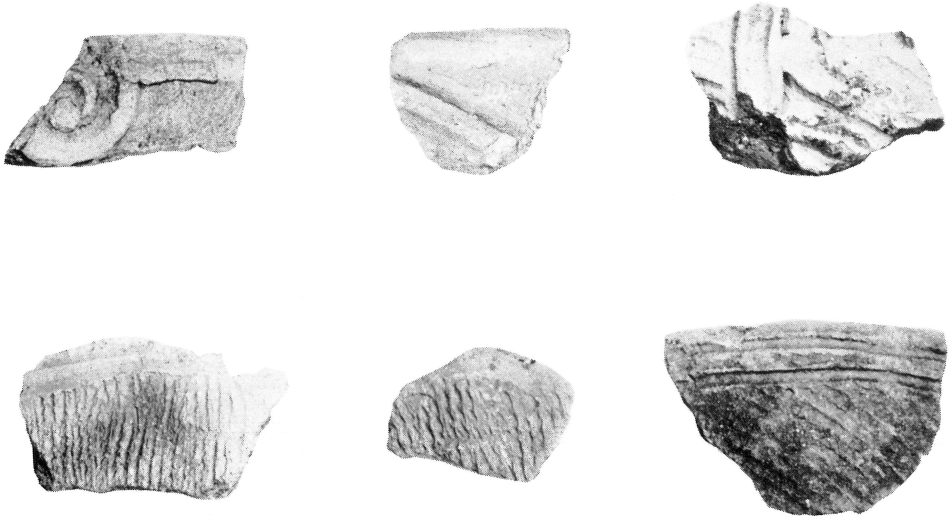


地下式横穴第１号

図版10

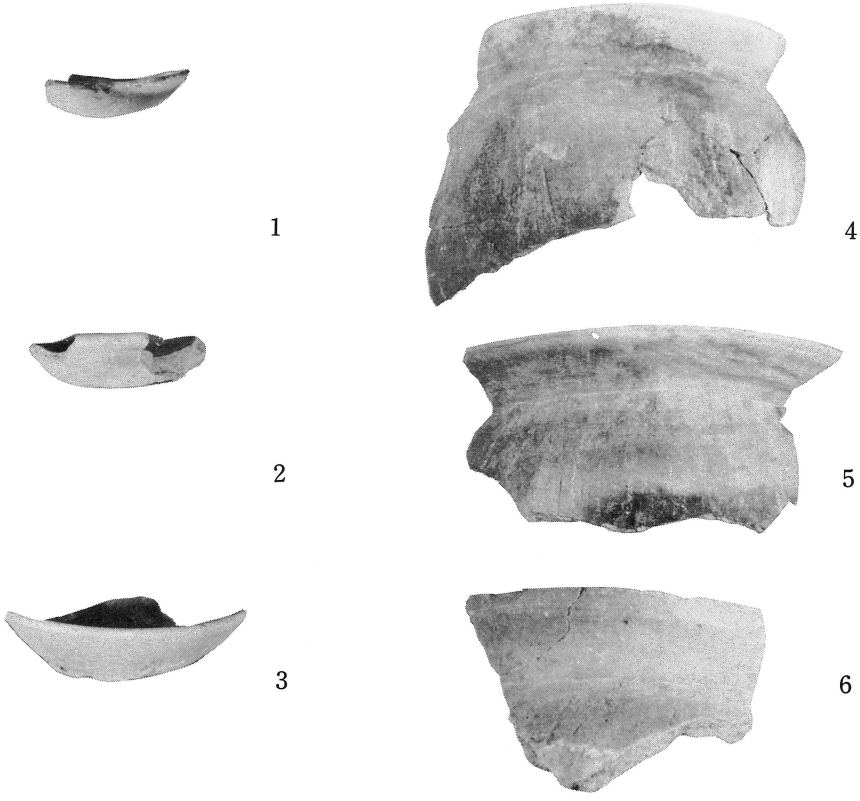


先土器時代の遺物



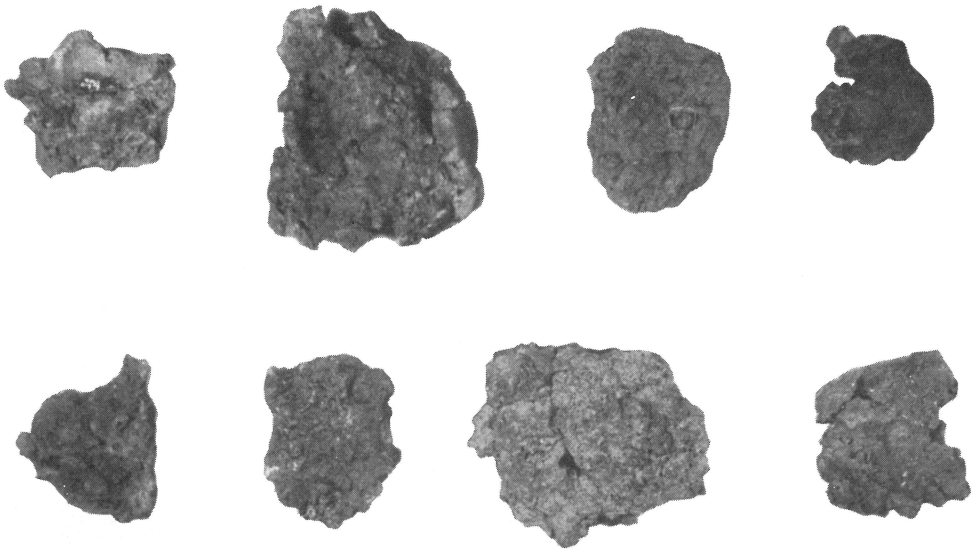
縄文時代の遺物 1

縄文時代の遺物 2

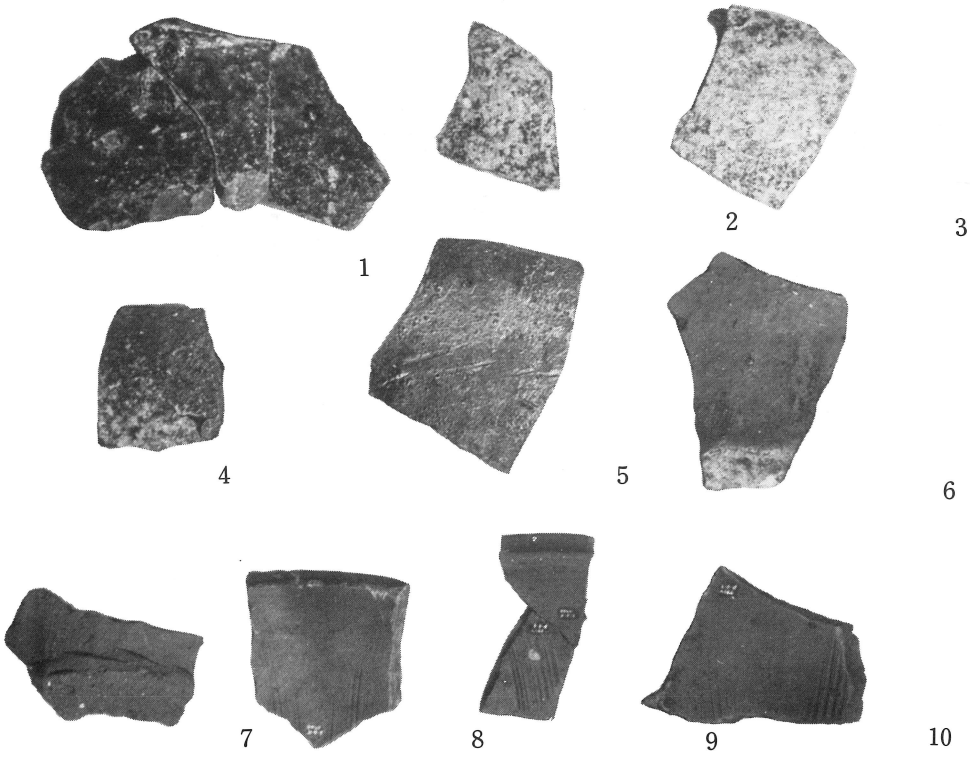


グリッド出土の土師器

図版12



鉄滓と鞴羽口

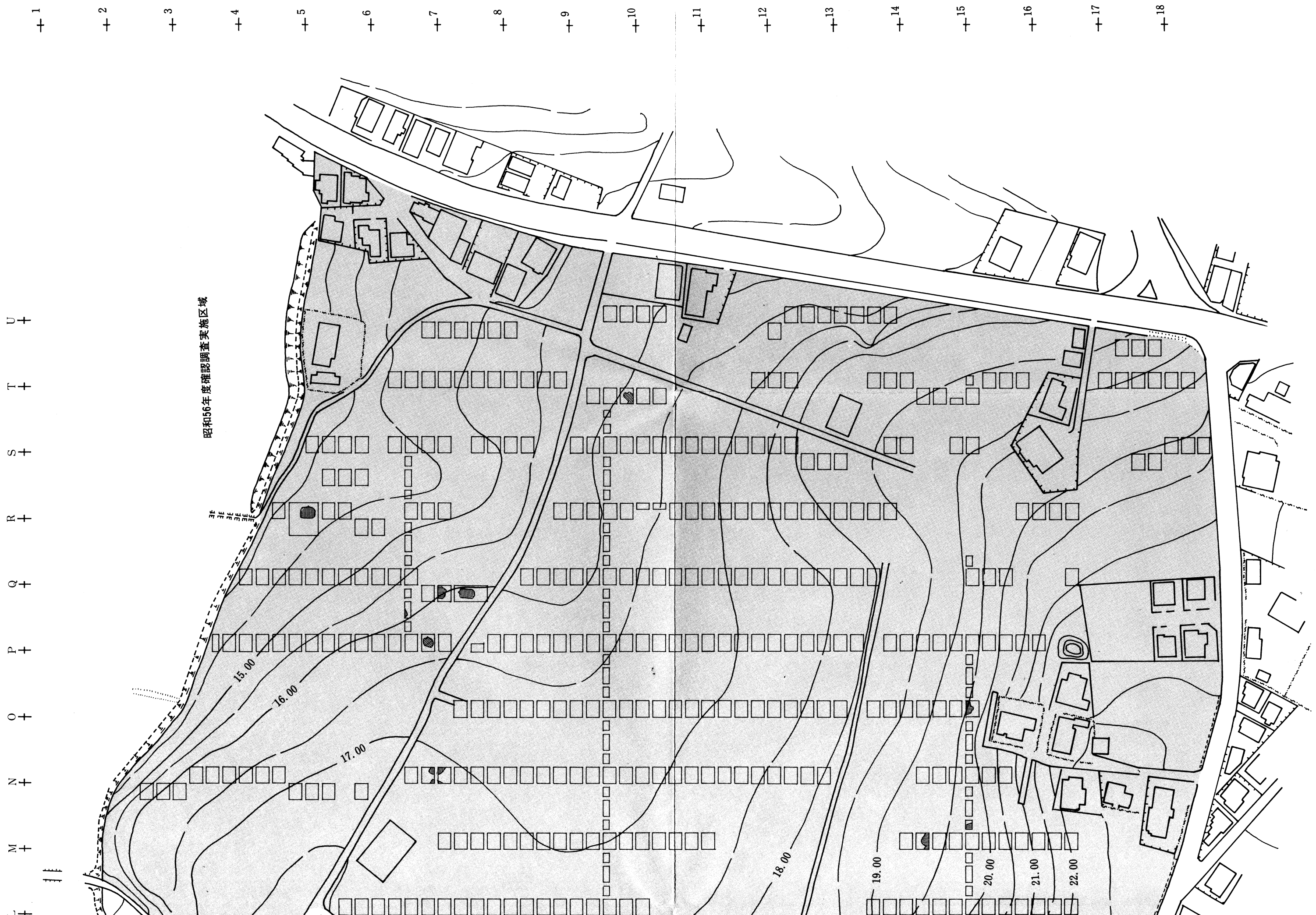


中世の遺物

千葉県八千代市高津新山遺跡 Ⅱ
—昭和57年度確認調査の概要—

印刷日　1983年 3月25日
発行日　1983年 3月31日
発　行　八千代市教育委員会
印　刷　(株) 山 下 印 刷

第１図　高津新山遺跡の地形測量図及びグリッド配置図（1/1000）


昭和56年度確認調査実施区域
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
L
M
N
O
P
Q
R
S
T
U
15.00
16.00
17.00
18.00
19.00
20.00
21.00
22.00
0
50m